

人間主義の幼児教育

河野 重男

これからの幼児教育のあり方を「人間主義」という視点からとらえていくことが大切だと思う。

この観点から強調したいのは、「教育環境の人間化」ということである。

このことは、幼稚園教育要領の総則の冒頭において、高らかに謳いあげられている。

「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。このため、教師は幼児との信頼関係を十分に築き、幼児と共によりよい教育環境を創造するように努めるものとする」

これがよく言われる「環境による教育」ということとであり、教育要領の哲学であり、理念なのである。そして、この「環境による教育」という主張は、先に臨時教育審議会が提唱した「教育環境の人間化」の主張と密接に関連している。

臨時教育審議会は、周知のように、その第一次答申（昭和六十年六月）において、教育改革の基本的考え方として、「個性重視の原則」を第一とする八項目を挙げ、その中で、「教育環境の人間化」を第五項目として謳い、次のように述べていた。

「今日、子どもたちにとって生活・教育環境が悪化している。学校においては、過熟した受験競争のなかで、児童・生徒の間、あるいは児童・生徒と教師の間に、心の触れ合いや人間的なつながり、友情、信頼が失われがちになっている。」

また、情報化など科学技術の進歩や都市化の進展により、子どもが家庭や地域社会で人間性豊かに育成されることが阻害され、自然のなかで相互に切磋琢磨する機会が失われている。

このため、学校の教育機能と家庭、地域の教育機能との相互の基本的在り方を問い直し、新しい家庭や地域の在り方を模索するとともに、教師ひとりひとりが子どもの心や体を理解できるよう努めること、自然環境のなかで心身を鍛練できるような教育のシステムを導入すること、子どもを取り巻く学校や日常の様々な環境条件について、子どもの豊かな心を育て、たくましい体を作り上げるよう配慮することが重要である。」

このようにみえてくると、幼児教育の基本は「幼児と教師とが十分な信頼関係をもって共にかかわり合う環境づくり」に帰着することになる。いうまでもなく、この場合の幼児とは、それぞれに個性的な可能性をもつひとりひとりの子ども、という意味である。ここですぐに想起されるのが、「共感の心」とでも題すべき倉橋惣三の一文である。

廊下で

泣いている子がある

涙は拭いてやる

泣いてはいけないという

なぜ泣くのと尋ねる

弱虫ねえという

：随分いろいろのことはいいもし

してやりもするが

ただ一つしてやらないことがある

泣かずにいられない心もちへの共感である

(東京家政学院大学長)